



# ドーピングの歴史

一般社団法人山口県薬剤師会  
薬剤師・スポーツファーマシスト  
神谷 浩貴

2024年のパリオリンピックで、日本は金20個、銀12個、銅13個の計45個を獲得し、海外で開催されたオリンピックで金、メダル総数とも最多となり、躍進の年となりました。

しかし、世界の選手に目を向けて見ると、残念ながらドーピングの抜き打ち検査で何例か陽性事例があり、暫定的資格停止処分が確定したようです。

WADA（世界アンチ・ドーピング機構）などにより規制と厳重な検査が行われているにもかかわらずドーピング事例は後をたちません。

今回は、ドーピングの歴史についてひも解いてみましょう。

## ○ドーピングの起源

ドーピングという単語の起源は、アフリカ南部の原住民カフィール族が祭礼の時などに飲む強い酒「dop」にあるといわれています（諸説あり）。

古代ギリシャ時代には、競技者が興奮剤等をドーピング目的で用いるようになり、19世紀には競走馬に対し麻薬や興奮剤が用いられていました。スポーツの世界では、ドーピングの使用として記録に残るうち最も古いものは、1865年の水泳競技大会とされており、1886年の自転車レースでは興奮剤の過剰摂取により、最初の死者がでています。

## ○アンチ・ドーピング活動のはじまり

1928年に国際陸上競技連盟が興奮剤の使用を禁止し、他競技団体も追随するようになりますが、ドーピング検査は無く、禁止の実行性は乏しかったようです。

1960年のローマオリンピックの競技中に自転車競技の選手が興奮剤の使用により急性心不全で死亡するという事故をきっかけに、国際オリンピック委員会は、スポーツにおいて禁止する物質のリストを定め、1968年のグルノーブルオリンピックとメキシコオリンピックから、ドーピング検査を近代オリンピックで初めて正式に導入しました。

2000年シドニーオリンピックから、これまでドーピング検査は尿検査だけだったところ、血液検査も実施されるようになりました。また、この大会から、選手宣誓に「ドーピング」についての文章が追加され「スポーツの栄光とチームの名誉のため、決してドーピングをしないよう、オリンピック競技大会に参加することを誓います」という文で宣誓されるようになりました。

2004年のアテネオリンピックが、アンチ・ドーピング統一のルールである「世界アンチ・ドーピング規程」が適用された初めてのオリンピック大会となり、現在に至っています。

アンチ・ドーピング活動が年々充実してきているにもかかわらず、実際には、ドーピング検査をすり抜ける方法が巧妙になってきて、結果的に検査数を増やさざるを得ない流れとなっています。パリオリンピックでは、過去最多となる約4150人の選手が検査を受けたことが発表されています。この数は全選手の約39%で、2021年の東京オリンピックから4%も増加しています。検査数を増やすことによる対策ではなく、早く「ドーピング違反ゼロ」という報告が聞けるようになりたいものです。

参考：公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構ホームページ (<https://www.playtruejapan.org/>)